

ムスタン紀行　チャランにて

仲　紀久郎

平成二十六年八月

ジヨムソンの次なる宿泊地はガミてふ標高三千五百十米の町を豫定せり。されど彼の地には適切なる宿泊施設存せずとて急遽チャラン泊へと變更せらる。元より豫測不可能なる事態發生多き旅なれば想定の範囲内なり。チャランの標高ガミより約七十米高し。

ジープ乗継ぎ、雨中徒步登山、又ジープに乗りて漸くチャランに到着せし時は既に夜の七時半なり。夕食は此れより作り始むとの事にて、先づは部屋割。本日は部屋數充分ならず、我等四人に割與へられし一室は屋上に設けられたる大部屋との事なり。

急なる梯子にて屋上へと登れり。屋上中央部には何故か大なる穴の開口す。手摺等無き意味不明の大穴なり。夜中に不注意にて或は寢惚けて落下せぬ事を祈るのみ。我等の部屋は其の大穴に面するドアより入るなり。ドアの眞前には煙突ありて炊事の煙吹出す。部屋に入るや否や直ちにドアを閉ぢて煙の室内に入るを防ぐの要あり。

部屋に入り、各自ベッドを選べり。リュックサックを置き荷物の整理を始む。ジヨムソンにて新たに購入せしリュックサックは早速雨の洗禮受けたり。雨中の歩行にて濡れたる雨具をば梁に掛け乾かさんとするも、梁埃塗まみれなり。窓際に並べ置く事とす。靴には日本より持參せる新聞紙を突つ込めり。

當地の電力狀況たるや停電の常態なるが如し。頭部に著用の小型懐中電燈は必需品なり。食堂へ入るも暗闇なり。「此處は一つ、戯れに電氣を消し後から來る人を驚かさん」とて息を殺し待つこと暫し。人の入り來るを合圖に顎の下から懐中電燈で己が顔を照らし驚かす心算なるも全く效果あらず。我等の演出の不行届きは否めぬ乍ら、今回の同行メンバー、少々の事には驚かぬ強者ばかりなるを失念したり。

